

阿波野青畝著『掌俳話』Vol.4

10.

又俳句は挨拶の心がこもっております。

人と人との出会いには挨拶の言葉を交わされる習慣があります。挨拶を交わしてお互いの場がなごやかに美しくなることをご承知であります。

昔から日本人は挨拶を大切にしてきました。そして挨拶の心で詩歌を述べたのであります。その中でも俳句が一番よく季候の挨拶を述べます。それは季語を詩の約束としていることが立派な証左です。いきなりに用件を持ち出すよりも、まず今日は冷えますねと呼びかけて相手の心を親しくひきつけようとしします。

さみだれを集めて涼し最上川 芭蕉

大石田の連中にもてなしを受けた芭蕉は眼前の景色をほめて涼しと挨拶の心を示したのです。

岸に虫をつなぐ舟杭 一栄

連句ですから主人側も右の脇句で歓迎しました。

さみだれを集めて早し最上川 芭蕉

奥の細道の文中に「早し」と改めていますが、これは舟下りの実景としてあの急流のすさまじさを表現したのですが、やはり自然に対しては挨拶の心を失っていないと思います。

11.

滑稽に始まって、それがお互いの親睦の挨拶となっている俳諧（俳句）であることを申し上げたが、それは即興を旨とすることが必要になります。今日は要するに即興の事を話してみましよう。

俳句は最も短い詩型であるゆえに、さらりと当為即妙に処置するのがふさわしいわけであります。深い思想やら複雑な人間関係をおりこもうとするのは、甚だしい無理を冒かねばなりません。

俳句として面白く効果を上げるものは、打てばひびいて立つという気合であります。つまり即刻の感興を表現するということになります。考えに考えたものや、理屈をこねまわし、または読者を不愉快に導くような手段や、そういうふうな即興でないものは成功いたしません。

初時雨猿も小蓑を欲しげなり 芭蕉

しぐれに濡れる猿の姿を見るなり、即座に感興をこの句に叙したのであって、よどみを見せずその気分を十七字に盛りたいものです。

流れゆく大根の葉の早さかな 高浜虚子

見たままの即興です。

12.

元日や神代のことも思はるる 守武

俳句の元祖と言われている荒木田守武の句である。

俳句という名称は後から出来た。当時は発句と言ったのである。

発句というのは、俳諧連歌の発句の意味がある。俳諧連歌を略して連句という。連句は長句（五七五）と短句（七七）とを交互に連ねて長編となる。そこで連句の第一番に出発する句を発句とするから、発句は五七五の形をとらねばならない。

発句はまず連句を行う最初の挨拶を述べる。季節の挨拶をすることが習慣になっているので、発句は季語を用いることになった。

わが国の風土は四季のうつりかわりが正しく、春夏秋冬と変化するにしたがって自然も人事も詩や歌の良い材料となり、且つ優れた文学を生んできたことは周知のとおりである。

発句が季語を用いるという長年月の経験によって、季節の感情が豊富となり、繊細となりいろいろ多種多様の面を表現し、またはそれによって俳人はさまざまな性格を発揮する。

俳句の母体は和歌である。和歌から連歌が派生し、連歌が俳諧連歌に移ってきて発句が生まれたという歴史を振り返ってみてほしいのである。